

[花き部門]

1. 「旧盆出荷用小ギク電照栽培マニュアル」の作成

[要約]

夏秋小ギク「精こまき、精ちぐさ、すばる、はるか」を用いて、6月まで電照を行い、需要が高まる8月上旬に開花ピークを迎えるための「旧盆出荷用小ギク電照栽培マニュアル」（全12ページ）を作成した。

[担当] 岡山県農林水産総合センター 農業研究所 野菜・花研究室

[連絡先] 電話086-955-0277

[分類] 技術

[背景・ねらい]

夏秋小ギクの旧盆出荷作型において、適切な品種を用いて電照栽培を行うことによって、需要が高まる8月上旬に安定的に開花させる技術を開発したので、マニュアルを作成し、普及を図る。

[成果の内容・特徴]

1. 品種は「精こまき、精ちぐさ、すばる、はるか」を用いる。
2. 親株養成時、挿し芽時及び定植～6月上中旬に電照を行う。電照には、75W型電照用白熱電球を用いる。電球は、1.5～2mの高さに、2～3mごとに1灯設置する。親株養成時および挿し芽時は深夜6時間（22時点灯、4時消灯）、定植後は深夜4～6時間（22時点灯、2～4時消灯）の暗期中断を行う。
3. 発蕾が早く、開花が早まると予想される場合には、頂花発蕾時から再電照（深夜22～2時）を行うことで、開花を数日遅らせることができる。発蕾が遅く、開花が遅れると予想される場合には、頂花発蕾時から破蕾時にジベレリン処理（100ppm、2回処理）を開始することで、開花を数日早めることができる。

[成果の活用面・留意点]

1. 再電照によって、側枝数及び花蕾数が減少する場合がある。ジベレリン処理によって、花首が長くなる場合がある。
2. 本マニュアル（図1）は、各農業普及指導センターに配布する。

[具体的データ]

旧盆出荷用小ギク 電照栽培マニュアル



岡山県農林水産総合センター 農業研究所

●はじめに	1
●技術の概要	2
◆作型	3
◆品種	3
◆栽培技術	
1. 育苗	
(1) 親株養成	4
(2) 挿し芽	5
2. 定植準備	5
3. 定植	5
4. 電照	6
5. 管理	
(1) 摘心	7
(2) 整枝	7
(3) かん水	7
(4) 支柱、ネット張り	7
(5) 病害虫防除	7
6. 収穫出荷	7
7. 開花微調節	8
(1) ジベレリン処理	9
(2) 再電照	10
●電照について	11

技術の概要

小ギクは、昼間が所定の時間よりも短いとき（夜の時間が長いとき）に花芽の分化・発達が促進される「短日植物」で、夜間の電照（長日処理）によって花芽分化および発達を抑制できる。夏秋小ギクも、長日処理によって花芽分化・発達を抑制することができるが、品種によって効果は大きく異なり、夜間の電照によって花芽分化・発達が大きく抑制される品種から、ほとんど抑制されない品種まである。本技術では、電照によって花芽分化・発達が大きく抑制される品種を用いて、定植時から6月まで電照を行い、8月上旬に開花ピークを迎えることを目的としている。以下、適応品種や電照栽培技術の概要について解説する。

旧盆出荷用電照栽培のイメージ

電照期間			自然日長期間	
定植	摘心	消灯	発蕾	開花
4月 中旬	4月 下旬	6月 上旬	7月 上旬	8月 上旬

これまでの栽培のイメージ

自然日長期間				
定植	摘心	発蕾、開花日の変動が大きい		
4月 中旬	4月 下旬	6月 下旬	7月 上旬	7月 下旬

4. 電照

定植時から6月上旬まで、電照を行う。電照は、100W相当の白熱電球を用いる。消費電力および光量の面から、75W形電照用電球が望ましい。白熱電球を、高さ1.5～2mの高さに、2～3mごとに1灯設置し、深夜4～6時間（22時点灯、2～4時消灯）の暗期中断を行う。秋ギクの電照栽培では、電球を3mごとに1灯設置して、畝面の照度を50ルクス以上とし、深夜3～4時間の暗期中断を行うのが一般的である。しかし、夏秋ギクは、秋ギクに比べて、花芽分化・発達の抑制により高い照度やより長い電照時間を必要とすると考えられている。電球の高さを2m程度とすることで明るさのばらつきを、電球の設置間隔を2m程度とすることで照度不足を少なくすることが期待される。また、深夜6時間の暗期中断でより高い効果が期待される。

電球の配置例

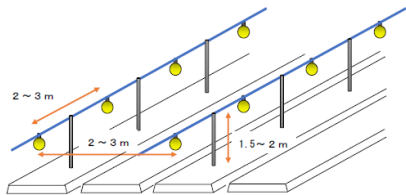


図1 マニュアルの抜粋

[その他]

研究課題名：温暖化に対応した夏秋需要期キク安定開花調節技術の開発

予算区分：受託（気候変動プロ）

研究期間：2010～2014年度

研究担当者：森義雄、中島拓、藤本拓郎